

「第三十五回庭野平和賞」贈呈式 名誉会長（ご挨拶）

本日は、「第三十五回庭野平和賞」の贈呈式に際し、文部

科学事務次官・戸谷 とだに かずお 一夫様、レバノン大使館領事部・橋本 はしもと

彩可様 あやか、日本宗教連盟理事長・芳村 よしむら まさのり 正徳様をはじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、あつく御礼申し上げます。

今年度の庭野平和賞を、レバノンのNGOである「アディアン財団」にお贈りできますことは、大変光栄なことでございます。また、選考にあられたノムファンド・ワラザ委員長さまはじめ、庭野平和賞委員会の皆さまに深く敬意を表する次第であります。

只今、ワラザ委員長さまから選考経過のご報告がありましたように、「アディアン財団」は、レバノンにおいて、和解と共生への先駆的な働きをされている団体であります。宗教が「対立の道具」とされている状況を深く憂慮し、諸宗教に共通する根源的な教えを伝えることを通して、自己と他者の宗教を正しく理解する取り組みを進めてこられました。

私が、特に注目するのは、多様性を重んじる教育活動に力点を置かれていることです。

中国の古典に次のような言葉があります。

「一年計画ならば穀物を植えるのがいい。十年計画ならば樹木を植えるのがいい。終身計画ならば人を育てるのに及ぶものがない」と。

長期的な視点で国づくりを行うには、人の育成が最も重要という意味合いであります。

「アディアン財団」が進める教育活動も、現時点のレバノンのみならず、二十年後、三十年後のレバノンを見据えて実施されているものであらうと思えます。

青少年の頃に学んだことは、一人ひとりの心にしっかりと刻まれ、その後の生き方に大きな影響を与えます。また、自己の内面だけにとどまらず、周囲の人々に対しても、言葉や行動となって伝わり、広がっていきます。時を経て、子孫に受け継がれることにもなります。

だからこそ、何よりも、教育の中身が問われるのであります。

世界には、自国の正当性を強調する一方、他の民族や国に対しては批判的で不寛容な教育も存在します。個々の国には、それぞれの歴史・文化があり、それに耳を傾けることが大切であります。不寛容な教育は、結局、不寛容な世界しか生み出さないことを、互いに認識すべきでありましょう。

その点において、「アディアン財団」は、自己と他者との関係、特に多様性ということを、極めて建設的に受けとめておられます。

個々人の間、コミュニティの間の多様性が、豊かさ、相互理解、創造的発展、持続可能な平和に結びついていく——つまり、多様性は「弱み」ではなく、「強み」であることを証明する教育を目指されています。

しかも「アディアン財団」は、具体的な教育を、レバノンの教育・高等教育省など公的機関と連携し、教科書を作成し、

公式のカリキュラムとして実施しているのであります。

大変素晴らしいことであり、深く敬意を表したいと思いません。

私たち一人ひとりは、みな独自の個性を持っています。人間は誰でも、相対的に見れば、さまざまな違いがありますが、本質的には一人ひとりが他に類のない尊い存在です。

例えば、樹木は、根っこは一つでも、幹が伸びて、枝葉を茂らせ、やがては花を咲かせ実を結ぶものもあります。幹、枝、葉、花と実と、いろいろな姿かたち、持ち味があり、それを活かし合って、一本の樹木が成り立っています。

そうしたいのちの成り立ちを人間にも当てはめて、お互いに合掌・礼拝し合う。表面の違いを超え、一人ひとりを讃嘆することの大切さが、仏教に説かれてあります。

また、この世のすべての物事は、それ自体が単独で存在するものは何一つなく、相互に依存し、関係し合っています。そして私たちは、人間はもちろん、太陽の光、水、空気、動物など、宇宙の一切合切のお陰さまで、いま、こうして生かされています。

そのありのままの相を見つめると、単なる個人のいのちという捉え方を超えて、すべてが「一つの大きいいのち」であることを自覚することができます。それは、自他一体、すべてが兄弟姉妹であるという宗教的自覚であります。

これは仏教の捉え方ですが、「アディアン財団」の方々にも、ご理解頂けるものがあるのではないかと思います。

要は、他者に対する思いやりの心、愛や慈悲の心を持つ人が、一人でも多くなっていくことが大事であります。兄弟姉

妹として、相手を理解し、深く配慮する。相手の立場に立って、苦しみや悲しみを共有する。そうした豊かな心・温かな心を育てるのが、いわゆる平和教育の根本ではないでしょうか。

この地球上には、国も、民族も、文化も違うさまざまな人々が暮らしています。「アディアン財団」の方々と同様、私も、「違いの中から豊かさが生まれる」と考えております。

自分とは異なる存在と出会うことで、互いに良いものを提供することができません。他を知ることを通して、自らを顧みることもできます。それぞれの長を学び、共に向上していくこともできます。共通点を見出し、協力し合うこともできるのであります。

自らの宗教に忠実であればあるほど、排他的になるとの見方がありますが、それには、私は疑問を抱くのであります。「自らの信仰を深め、その核心に至るならば、共通する願いに気づき、分かち合うことができる。真に他者を認めていく」——それが真まことの信仰の姿勢であると受けとめております。

私は、以前からレバノンの情勢を注意深く見守ってまいりました。諸宗教の国際会議等を通じて、レバノンの友人もできました。大変複雑で困難な歴史を経てきたことも理解しております。

その中で、創立からわずか十二年の「アディアン財団」が、ここまで活動を発展させ、周辺国にまで広がりを見せようとしていることに、深く感銘を受けると共に、驚きを禁じ得ま

せん。

優秀なリーダーとスタッフのもと、真にレバノンが必要としている活動を、誠実に進められてきた証でありましょう。

「アディアン財団」が進める諸活動を通して、やがてレバノンに和解と共生の時代が訪れることを切に念願致します。

本日の贈呈式を契機として、「アディアン財団」の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、また「アディアン財団」の皆さまがご健康で、これまで同様にご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございました。